南島民間説話研究の展望

――二、三の事例を通じて――

山下欣一

一、はじめに

南島における民間説話の採話、整理は、近年において飛躍的に進展しているのは周知の如くである。[1] さらに、また、主として、日本本土との比較研究が展開されてきたが、近時においては、多方面からする研究も二、三散見できる現状がある。このような現状を視野におきながら、まずは代表的な論文について、これらを紹介しながら、方法論についての立場から若干の検討を加えることを試みてみたいと考える。いうならば研究の現段階についての問題提示となると考えるからである。次に、奄美、沖縄における事例群とその考察について例示することを行なうことにしたい。さらに、結びとして、今後の研究の展望について、二、三指摘することにしたい。

二、研究の現状

近時発表された南島の民間説話についての論文の中から、管見の範囲において注目すべき二、三についてここにあげることにしたい。

まず、松井健が宮古諸島来間島の儀礼と口承伝承に焦点をあてて発表した論文を提示することにしたい。[2] 宮古本島の南西部、伊良部島のほぼ南に寄りそうように浮かぶ来間島がある。面積二・八平方キロ、周囲六・五キロの小島である。現在七十五世帯、二百人が住み、農業に従事している。この来間島には、すでに遠藤庄治によって報告されたヤーマス・ウガンという祭儀の由来伝承の島建て説話が伝承されているので著名である。

松井健は、まず次の三点の論点を集約する。第一点は、来間島の調査結果をもとに、同島における口承伝承と儀礼の概要を記述し、その両者間にみられる対応関係を明確にする。第二点は、第一の論点をふまえて、宮古群島でおこなわれている儀礼が二群に分けられることを示すことにする。第三点は、象徴二元論とにかかわる来間島を中心に、二元論的分類がどのようなかたちで儀礼世界の演出に採用されているかの分析を試みたいとする。そして、このような分

析をもとに、より抽象度の高い世界観が、どのようにして具体的なかたちで儀礼のなかに表現されるのか、そして、その際の演出論、そこでどのように象徴作用が発揮されるのか、というような諸問題について、いくつかの手がかりを提示しつつ、論究のための戦略を考えてみるということを提示する。次に、来間島の概要、集落が東西と南北に走る道によってくぎられ、東西に長い方形にほぼまとまっていること、そして、東と西は、はっきりとした象徴的対立による意味づけがみられるし、南北も同様であること、儀礼のおこなわれる拝所などを要約する。そして、来間島の口承伝承について、①ヤーマス・ウガン由来伝承、②島生み伝承についての二つの伝承の資料をまとめ、その後者は兄妹始祖譚であることを指摘する。

さらに、来間島の儀礼について検討する。この儀礼には集落の全員が参加するものと、神女たちを中心に実修されるものがあり、この両者には、はっきりと差がみられる。また、集落の下位集団によるサト・ウガンもあり、各家庭でヤージャスを招いてのウガンもある。このうち、集落全員が参加するのに旧暦八、九月キノエウマの日とその翌日のヤーマス・ウガンがある。また、神女のみが担当するのに旧暦四月、六月、八月のコモン・ニガーズがあって、それぞれに、来間島の儀礼の代表的なものであるので、この二者を精細に記録して提示する。つづいてこれらの儀礼の記録の検討によって、口承伝承との対応関係をみようとする。来間島の島生みの伝承のアガルヌサツに降りた男神と、イルヌサツに降りた女神が、島の中央で出会って、来間島のもろもろのものを生んだという伝承はコモン・ニガーズにおける神女たちの行動をそのまま反映しているとする。ヤーマス・ウガンの伝承は三人の兄弟による島建て伝承であるが、これはかなり明確な対応を示しているとする。これらの関係を要約してみると次のようになる。

○ヤーマス・ウガン―男性主導――擬制的父系出自集団（ブナカ）の祭祀集団の競合発展が認められる。
　口承伝承との対応も意識的で、対応の補強、理論化の試みがなされている。

○コモン・ニガーズ――女性主導型―神女組織が年三回、男神と女神との働きを空間的に再現する。
　伝承との対応は無意識であるか、意識されても口外されない。

以上の両者は、別個の論理体系で重層的に存在しているといえるとする。そして、このような検討を手がかりに、その記述研究から、宮古群島全体の祭祀世界の理解のため手がかりを考えたのであるとしている。

松井健は象徴論的見地から宮古諸島来間島に焦点を当て、儀礼群とその口承伝承との対応の分析において、かなり明確な象徴二元論の体系を抽出している点とこの試みを手がかりにして宮古群島全体へと視点を拡大していこうという展望をおこなっている。松井健は、本論文において「口承伝承」という用語を一貫して使用している点と従来の民間説話の分類、整理、比較という視点を導入していない点に特色があるといえる。

福田晃は、南島各地にわたっての民間説話の採話、整理、集成をおこないつつ、精力的に論考を発表しているが、最近、南島の天人女房譚について興味深い論文を発表している。[3] 福田晃は、南島にお

ける民間説話が真実に傾斜する傾向の強いこと、昔話、伝説、世間話の境界が判定しにくいこと、昔話も世間話も真実を主張する伝説に近づいて伝承される点を指摘する。さらに、このことは、南島の説話が民俗信仰とのつながりが深く、伝説、昔話、世間話も民俗信仰の要素を含んで語られると換言できるとする。要するに、神々が生きている民俗社会なれば、伝説のみでなく、昔話も世間話も真実に傾斜するといえる。しかも、それが伝承素材としての昔話であっても、それが伝説を越えて「神話」として機能することもしばしばある。

このような南島伝承の特質を示す一例として「天人女房譚」をとりあげるとして問題提示をしている。そして、まず奄美諸島喜界島の「天人女房」の事例をあげ、結末部分に兄はトゥキ（占者）、姉はヌル（祝女）、妹はユタ（巫女）の始祖になったという伝承に着目し、これを巫祖譚としてまとめる。これらが正月、九月の「ユタ祝い」、「トキ祝い」の祭儀に唱誦される呪詞であり、さらには、ノロの始祖を唱誦したものでもあったろうと推考する。さらに、加計呂麻島のユタが神拝みの際に唱誦する祭文、また口説として特色を持つ、請島伝承の天人女房をあげて、巫祖由来譚は、もともと巫覡を職とする人々のなかにあったものと推測されるから、薩川のユタの伝承が口説によるものとすれば、それは口説の流行にそいながらの再現ということになるとする。

次に沖縄の巫祖譚に目を転じ、読谷村の事例、また与那国島比川の事例をあげ、共通して「銘苅子」の固有名詞を持つことなどから、「銘苅口説」は沖縄本島の中央で流行したものが、八重山の南端にまで及んだものとする。そして、「七星女房」に属する話で「銘苅子」が複合した伝承例をあげて、ツカサ、ディディビという女性祭祀者と男性祭祀者の始祖譚を持つのは「銘苅口説」がツカサ、ディディビ始祖由来譚の伝承に吸引されたとする。福田晃は「銘苅口説」に風化される以前には巫祖由来を説く「天人女房」を伝える巫覡の家筋は少なくなかったであろうとして、その痕跡として、与那国島比川の巫祖由来譚とする。そして、これらを『琉球国由来記』から「オンタマの嶽」「大見武ノ嶽」「久場堂嶽」にある「降下型」の「天人女房」譚がノロ、地頭職の始まりを説くものであることを引用して実証する。このようなことから、天女祭祀のマツリゴトの存したこと、それは天女の子孫のノロの司祭するものであったこと、奄美の成巫儀礼から類推して、ノロの就任儀礼には、天女の葬地である聖地で、巫祖祭文「天人女房」が唱誦されたものであったろうとする。そして、巫祖由来を説く「銘苅口説」も、もともと尚真王につながる祝女集団の巫祖祭文に従ったものと想定できるとする。

さらに、沖縄の王権譚にまつわる「天人女房」譚を検討し、地域の豪族の始祖譚が、国家レベルで、支配者の側から主張されるときには、いわゆる王権説話として機能することになるとして、まずは尚真王夫人からサスカサアジガナシに及ぶ神女の出自を主張する銘苅子関係の例をあげる。そして、この話が銘苅子の聖伝となり、琉球王府の高級神女の系譜のなかで唱誦されてきたものと推定され、いまだ王権神話にはいたっていないとする。しかして、第一尚王朝に先だつ察度王統の察度には「離別型」の天人女房譚がついているが、後半には「初婚型」炭焼長者譚が述べられている。この後半に

よって、この話は神話としての性格を後退させ王権伝説へ傾斜したものにしている。このことは王権伝承が祝女、神女たちの世界から遊離するものになっているといえるとする。次に南島各地における伝説レベルの伝承を概観し泉、川などとのむすびつきをみる。そして「天人女房」と神女の関係を伝承に従って検討し、南島における天人女房譚は、聖なる川・泉に拠って神拝みに従う神女、祝女、巫女の姿と深くかかわって伝承させてきた、あるいは、その姿のなかで、幻想、育成されたものであろうし、それゆえに、その神女の成巫儀礼ともかかわり、巫祖祭文としての機能をも保持することともなっていたとして結語とする。

福田晃のこの論考は、南島全域に視野をおき、南島の民間説話の特質である真実の話へ傾斜を説話資料群から「天人女房譚」をとりあげ、実証的に資料群を駆使しつつ、南島の民俗社会におけるカミ・ガミとともに生きるシマ共同体において、それらの巫祖由来譚としての性格の本質に迫るという試みである。その実態は、神女の就任儀礼に唱誦される巫祖祭文であろうという想定の結論を提示しているのである。

また、福田晃とおなじように長年にわたって南島各地でのフィールド・ワークに従っている岩瀬博も、南島の民間説話について活発な発言を試みている。近時、南島の地域的特殊性に焦点を当てながら沖縄説話についての論考を発表している。[4] 岩瀬博は、各地の昔話採集に従事して、常に感じるのはその普遍性と特殊性であるとする。沖縄の昔話に接して十余年に至った現在、本土人である自分が懐かしさを覚える同質性と、地理的歴史的経緯に生ずる異質性をかなり知ることができたと思うとする。普遍と特殊は対立的概念であるが、沖縄の昔話に関するかぎり、心の内には対立がそのまま同居でもあるという奇妙な概念がたゆたっているとしている。しかして、沖縄における説話についての現行のタームに「ンカシバナシ」と「チテーバナシ」の系統があり、この両者について、内容上の分類、伝承心意と関係して重要な作業であるが、これらを簡単に、たとえばンカシバナシを即昔話に置き換えることは危険であり、チテーバナシを含めた広い領域を対象にしなければならないとする。

次にンカシバナシと昔話を検討するために、その「受容」を提示する。事例として、いかにも昔話然とした「猿の生肝」「猿長者」「狐の立聴」三話を取り上げ検討し、「猿長者」がいち早く流布し、それとて中層ないし表層に位置するもので、他の二話に至っては最表層の昔話であったとする。さらに「変容」に移り、沖縄には、本土型「唄う骸骨」の分布は稀である。そして、沖縄には、風葬を背景にする髑髏に対する信仰は強烈なものがある。このために、仮に「唄う骸骨」が伝播しても、その社会的、歴史的風土に引き寄せられて村々の骸骨の歌声に吸収されてしまい、根づかなかったに違いないとする。「犬聟入り」と「唄う骸骨」「枯骨報恩」に共通するモチーフを持つ「泡ぶく敵討ち」を事例としてあげる。同一話型に発しながら、本土と沖縄の歴史的、地理的条件の懸隔に生ずる話型の分岐は著しく、その変化は話型に留まらず、説話の主題、様式、機能にまで及ぶとする。そして、わが国のどの地域よりも、地域の歴史的、社会的条件が説話を照射するエネルギーとしてもっとも強く、変容によって独自性を主張する説話はそのほかにも数多く存在する

と指摘する。

つづいてチテーバナシについて、またチテーバナシとンカシバナシについて事例をあげて検討する。そして、チテーバナシをンカシバナシに連続しながらも、その容器には入り難い民間神話、伝説、世間話などをも包含する専門用語として用い、一つの概念を設定することが、沖縄説話の研究に寄与するとしている。そして、また、信仰を基盤として多岐多彩に花開くチテーバナシの花園に、ンカシバナシの種子が豊かに稔る実態を垣間見ることができ、沖縄説話の豊穣はその信仰社会に根ざしているとしている。最後に、沖縄説話の蒐集資料分析の方法として、次の三類型に着目し、それぞれの類型の意義の解明から、沖縄説話の本質に迫る方法が考えられようとして結びとしている。

一、本土と共通する説話

二、本土と同じ祖型に出発しながらも、沖縄的展開をしている説話

三、沖縄（南西諸島）独自の説話

岩瀬博は、沖縄説話を民俗名称であるンカシバナシとチテーバナシの二類型を認め、これらを直ちに分析概念として用いずに、慎重に日本本土との対比、神話、伝説、昔話という三大分類を視点におきつつ、沖縄説話群の分析を進めているものであることが理解できる。

また、川田牧人は、奄美諸島のカケロマ島における妖怪譚の構造分析を試みた論文を発表している。[5] 川田牧人は、奄美地方にケンムンと呼ばれる妖怪がしばしば民譚に登場するのを取り上げる。従来は、ケンムンの諸特徴に河童との相同性を見出して山の神に通ずるといった系譜論で捉えようとする立場での考究があった。これに対し、ひとつの民俗社会内での完結した説明によってケンムン譚を捉えようとする視点が考えられるとする。そして、この視点は、ケンムン譚の形式性は何に起因するか、一見現象追随的で無規則のように語られるケンムン譚は、その生成過程において何らかの論理構造が働いてはいないだろうか、それは奄美地方における他の文化現象とどのような関係があるのか。このような問題を明らかにするために、個々のケンムン譚の集積から明らかになるその構造と、それが奄美民俗文化の諸事象と密接に関連している様相を展開する意図を持つとする。

そして、まずケンムン譚の民俗的背景を素描し、奄美の人々を山と海に生きる人々として、一年を通してみると、生業と儀礼は互いに逆立像を提示し、海と山という相補的対立を人々の生活に内在化していること、多様な生活環境に応じた神々を想定して信仰生活を営んでいるが、神に対して、神の強大な威力を畏れ憚かる観念と神のもつ威力を望ましいものと考え、それを積極的にとりこもうとする観念とがあることを抽出する。さらに、加計呂麻島の人々の生活は自然や神々との交渉と同様に、動物との交渉も濃密なものがあるとして、動物をめぐる恩益と害悪を要約して提示する。

次にケンムンの構造に論考を進め、ケンムンについて語られる諸情報として、㈠ケンムンの出現場所（海か山か）、㈡人間側のケンムンへの対応の方法（畏憚するか招迎するか）、㈢ケンムンと出会ったことの結果（恩益を得るか、害悪を被るか）の三つの要素があ

るとして、これらは、互いに独立してケンムン譚の三つの側面を成し、その形成を規定しているとしている。そして、ケンムン譚の構造分析を試み、立体構造モデルを提示する。これらの構造モデルにおいて、ケンムン譚の民俗的背景として、人間の経済活動と儀礼活動、神観念、動物観念の三者が浮上し、それぞれは海―山、畏憚―招迎、恩益―害悪という互いに独立した基本構造を持っており、それが三重に組み合うことによってケンムン譚の三次元の二項対立構造を形成する。個々のケンムン譚を集積して捉えられるケンムンの全体像は、加計呂麻のさまざまな文化事象を一身に体現し、それらが整合性をもって構造化されているのであるとしている。

さらに、このような構造モデルの完成に止らず、進んで、意味論的構造分析から民俗社会論へと考察を展開している。そして、人間、神、動物のこのような関係は、カケロマ社会の経験的事実に基づいている。カケロマ民俗社会の非人間世界との交流を考えるならば、人間は神に絶対的に依拠することができずしばしば動物を逃避口として神との関係を調停する半面、動物を完全に従属させることもできず神の力を借りてそれを制御することもある。したがって、神、人間、動物というような三つのカテゴリーに安易に階層化することはできない。むしろ、これら三者は同等に結合も相反もする、併存的で均質な関係にある。この関係を壮大な交響楽として理解できるとする。川田牧人は、ケンムンは、カケロマ民俗社会の精神世界を我々に垣間見せてくれるという点で、精神世界の縮図なのであるとしている。

以上、近時、発表された南島の民間説話について、管見の範囲内において、代表的な論考の二、三について紹介してみたのである。ここでは、南島の民間説話研究の深化と進展を看取することができるのであり、このような現状から、今後の研究の展望を試みるためでもあった。次に、二、三の事例群を抽出し、要約的に問題点を提示することにしたい。

三、二、三の事例

事例(1)「キンノカネ」(奄美大島竜郷町手広)

手広の海岸にガクマルという洞穴状の場所があり、ケンムン(妖怪)の出る所として恐れられている。このガクマルにはキンノカネが隠されているという伝承がある。この伝承を要約して示せば次のようである。

「島津公が日の三日で沖縄を占領した。首里城では二十歳と十八歳の王女が城門の両側に隠れていて奮戦した。しかし、刀の目釘がこわれ、髪にさした〃かんざし〃を目釘にして戦った。その中に髪がほどけて顔にかかり、前を見ることができず、戦うことをあきらめた。薩摩は、この王女を含めて王の一族を薩摩へ連れていくことにした。しかし、薩摩への途中、この一族は奄美大島の沖で台風に襲われ難破した。その死体と装身具から、貴重なものが全部、手広のガクマルの下の浜に流れついて、うちあげられた。これらをすべてガクマルにおさめた。そして、また、これらをガクマルのキンノカネと呼んでいる。」

この伝承のあるガクマルの海岸付近は「カミダカイ」場所として、

人々はあまり近づかない。もし、この付近に足を踏み入れるときは「クチモト」を唱えるのだという。また、次の伝承もある。

明治二三年生（一八九〇）の男性の義兄が死亡した時、推定で明治四〇年（一九〇七）頃のことである。笠利町の喜瀬のユタを頼んで、マブリワーシ（口寄せ）をしてもらったことがある。すると、義兄が生前ガクマルのキンノカネを持ってきて、家に隠してあるので、急いでさがし、このキンノカネをガクマルへもとの場所へもどしなさいとのことであった。そこで、家の中をさがすと、それらしき金属片が二、三片でてきたので、これをユタと二人でもどしにいったという。また、旧暦の盆の十六日の夜には、ガクマルの沖にあかりをともした船がみえるというし、ガクマルには、沖縄の王の一族は、生きたまま上陸し、そこで死んだという伝承もある。(6)

事例(2)「ウフジチュー」（沖縄本島知念村安座真）

沖縄本島南東部の久高島を望む聖地セイハ御嶽の麓に位置する知念村の北部に安座真という集落がある。この集落では二年毎にウフジチューウーエーがある。ウフジチューのお祝いという祭儀である。現在では区長とダカリーと呼ばれる二人の男性の祭儀当番が中心になって祭りの準備をしている。経費は集落が負担し、司祭者はヌルとネブトイという男性の補助者である。供物としてはウフジチューが百二十歳まで長寿を保ったというので、百二十個の餅（つき餅でなく、煮た餅）と魚が主である。魚は煮た魚を芭蕉の葉で包んだタバユーとサギユー（舟をこぐかいに下げた魚）の二種がある。タバユーは供物に、サギユーはアサギ（集落の祭場）のそばにたてかけておかれる。アサギで祭りを終った一行はセイハ御嶽のウジョウグチ（御門口）に至り、ヌルが拝み、サギユーを肩にしたダカリーは久高島の方へ向いて「ヘーイ、ヘーイ。ハマレー、プシュー」と二回叫ぶ。それから聖なる港であったマチガキドマリの海辺にあるマルチャ石でも祭る。また、集落にもどりアサギに至り終るのである。

要約していえば、ウフジチューについては出自と形状について次のような伝承がある。

①ヲウチキュウ（海神）、身長三メートル、大睾丸、那覇、泊、城間、国頭に姿を現わす。（『琉球神記』一六〇五）

②名前、大神宮（ウフジチュー）、身長三メートル、力大、百二十歳に死亡。大卵包、子孫もしかり。『（遺老説伝』一七四五）

③一僧那覇に漂着。安座真に住む。身長一メートル八十二センチ余。大睾丸。百二十歳で死亡。（『琉球発祥史』（新垣孫一、一九五五）。さらに安座真屋号「大殿内（ウフドンチ）」に神アサギがあり、古袈裟、珠子、香炉、日本刀が家宝としてある。

④昔、玉城（タマグスク）の主がサイハ御嶽で手に珠子をかけた若者を発見。自分の家に連れてくる。長じて身長一メートル八十二センチ余。大睾丸。百二十歳にて死亡。生誕日一月十八日、死んだ日が旧四月十八日に遺言の通り餅百二十個を供えて祭る。（『東支那海』創刊号、一九七一）

これらの②③④に共通して、死後棺をひらくと、木の葉だけしかなかったという話がついている。また、②③にはウフジチューの子が親嶽で、大島征討に大功があったという伝承、乗馬の時に常に踏台を用いたとし、この踏台が現在も残っている伝承が話されている。(7)

事例(3)「幽霊屋敷」（奄美大島名瀬市）

奄美空港から名瀬市への途中、本茶峠（ンチャ）がある。現在ここには本茶トンネルが貫通して、トンネル周辺の開発が進んでいる。名瀬市側からトンネル入口にO氏（昭和十九年生）が白亜の家を新築した。O氏は名瀬市中心街で自営業を営んでいる。O氏は仕事が多忙で新築の家に移住をすぐに実行できなかった。O氏は五年ほど前大病し、名瀬市、鹿児島、沖縄と転院したが本復しない。全く憔悴して名瀬へ帰り、兄のすすめでユタにみてもらい、神拝みをして、それ以来健康になったのである。三年ほど前のある日、完成間近の本茶トンネル入口で光り物を発見し、それが観音像としての輪郭をはっきりさせてきた。それを写真にとり、拝んでいた。それが昨年の雑誌『タッチ』九月十五日号に掲載された。ところが、どこからとなくO氏の新築の家にまつわるうわさ話が話されてきた。それらの代表的なものを要約すると次の通りである。

①レストラン開業予定であるが、コックがいないので転売されている。

②家の中の家具がゆれる。

③夜に女性のすすり泣きの声が聞こえる。

④夜、馬が通る。

⑤死刑場跡であった。

⑥カミミチの跡であった。

⑦トンネル工事中に犠牲者が一人出たのでなにかがある。

まだ他にも、いろいろな話が組み合わされて話された。その結果、O氏へ直接電話がくるようになった。それは、持主が売りたがっているという話からその打診である。それは奄美大島、喜界島、徳之島からの電話が多く、この話の濃密な分布を示している。そして、また名瀬市内の中学生などは、放課後、自転車の列をつくり、この家を見物に行き、中には家のベランダにのぼり、テレビのアンテナなどや手すりをこわしたりするようになった。また、夕方は、トンネル入口のO氏の家の前の道路には見物の自動車の列ができた。O氏の親類、家族にもいろいろな話が伝わってきた。現在では、ほぼ鎮静化しているという。[8]

四、結び――展望として

南島民間説話研究の現状は、ほぼ南島全域をカバーする資料群の採話、整理、集成刊行が大幅に進歩を示しているとともに、多方面からする研究が着手されようとしている状況と考えることができる。従って、ここでは、まず南島民間説話研究についての管見の範囲内での代表的な論文を提示してみたのである。

まず松井健が宮古諸島来間島に焦点を当て、儀礼と口承伝承との対応関係を明確にしようとする試みを紹介してみた。来間島における資料の記述と分析を展開し、その象徴的二元論とを措定している。その目的としては、個々の話者による一連の話としての口承伝承の構成やその地理的分布は問題とせず、ひとつの儀礼をめぐる伝承群が、どのような複合的全体になっているかをみきわめ、その基本的な構造を措定することが重要なことであるとしている。儀礼を行なうとき、特定の儀礼を遂行して、それが象徴作用をもちうるのは、いろいろなレベルでの同型性を通して、人間の体験の原型へとつな

がると考えられるという見通しのもとに口承伝承の資料が検討され、儀礼は自らの象徴作用を強化するために、口承伝承などの領分とどのように連繋するのか、それはどのような論理によって支えられているかを終始問題として結論に到達しているのである。[9] おなじような視点から川田牧人もまた、奄美カケロマ島のケンムン譚の論理構造に奄美民俗文化の諸事象が総合的に内包されるコスモロジカルな論拠についての検討の試みを展開している。そして、福田晃は「天人女房」をとりあげ、南島伝承の特質を検討し「天人女房」が巫祖由来譚として話されているのに着目し、これらと、その伝承形態とノロ・ユタの儀礼との関連について分析し、これらが巫祖祭文として唱誦されたものであろうという考察を展開しているのである。岩瀬博は、普遍と特殊というテーマと関連する南島の説話をンカシバナシとチテーバナシという沖縄の説話の民俗名称を題材にして、その受容、変容という観点からその本質にせまろうとしている試みをおこなっている。この場合、民俗名称としての沖縄説話の二大区分をそのまま本土説話群と対応させてみるという安易な方法やそのまま分析概念という方法は慎重に避けているのである。

このようにみてくると、ここにあげた代表的論文において共通している主題は「南島の民俗社会」であり、その特性としての民俗社会である点は看取できる。しかして、民間説話そのものをどのように取扱うかが次の主題であると考える。

口承伝承、ケンムン譚とは、民間説話としてのそれであるのは理解できるが、この概念規定がまた問題であろう。民間説話の研究の前提になるのは資料群の整理、分類であり、その前提の上に考察が展開されるというのが従来の方法である。この意味からして福田晃、岩瀬博はこの方法をオーソドックスにとっていることを理解できる。この点についての方法論的検討と批判もまた主題である。というのは、主題である南島はこの検討にもっとも適したフィールドと考えられるからである。簡潔に事例群を奄美、沖縄から三例あげてみた。(1)奄美・竜郷・手広のガクマルのキンノカネの伝承は、手広という集落の境界の海岸にあり、昔の道でもあった海辺のそばにある洞穴である。この周辺は聖地として信じられており、またケンムンのよく出没する場所でもあった。この伝承がシャーマンとしてのユタの口寄せによって実証されている点に、そして、実際、その現場にいた話者が実証的に話している点にこの伝承の特色がある。ここでは民俗社会、ユタ、伝承の活性化、口寄せ儀礼の問題が相互に関連しているのである。(2)沖縄・知念・安座真のウフジチューの伝承は、集落全体の祭儀となっていて、二年毎に実修されているのである。そして、安座真に移住した祖先と考えられる三人兄弟がそれぞれ三門中となり、そのうちの王城門中にウフジチューが関係しているとも伝承されている。集落の系譜のなかには、ウフジチューが海から出現した、あるいは山からの出現という伝承もあるが、そのイメージは「英雄」であるのは間違いないところである。この場合のウフジチュー説話はどのように民俗社会に取り組まれ、一定の論理体系として位置しているかなどが検討の主題となろう。[10] (3)奄美・名瀬市の「幽霊屋敷」の話は、きわめて現代的な話である。しかし、この話の生成と伝播の方向とは、南島の説話の本質とは無関係でない。

説話は、特に、ここにあげた事例などは、すぐれて現代性を保持

している。それらを活性化するのに、南島の基層文化に関与しているシャーマンであるユタの活動がある点も忘れてはならないと思う。このような観点からして、南島民間説話研究の展望は、まず、多方面からの考察と検討がなされるであろうという点があげられる。この場合「民俗社会」とは南島ではどのようなものであるかが確認され、次に民間説話についての見解が明確化される必要があろう。さらに、民間説話についての現代性の検討も重要な主題として浮上してくるものであろう。このように要約してくると、南島民間説話の研究の一層の深化が展望できると考えるものである。

注

(1) 稲田浩二・小澤俊夫編　一九八〇　『日本昔話通観』25　鹿児島　同朋舎
稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観』26　沖縄　同朋舎
福田晃他編『南島昔話叢書』全十巻（一九八三年から刊行中。現在五巻が既刊。）

(2) 松井健　一九八六「儀礼と口承伝承――宮古群島来間島の事例を中心に――」『奄美沖縄の宗教的世界』（国立民族学博物館研究報告別冊3号）国立民族学博物館　三七―七三

(3) 福田晃　一九八七「南島の天人女房譚――その始原的伝承をめぐって――」『琉球文化と祭祀』（福田晃・湧上元雄編）ひるぎ社　一三九―一七八

(4) 岩瀬博　一九八七「沖縄説話」『民間説話の研究―日本と世界』（関敬吾博士米寿記念論文集）同朋舎　二三四―二四九

(5) 川田牧人　一九八七「妖怪の交響楽（シンフォニー）――奄美・加計呂麻島における妖怪譚の構造分析試論――」『日本民俗学』169　日本民俗学会　三七―七一

(6) 『竜郷町誌』（印刷中）

(7) 拙稿　一九八七「民間説話と儀礼――安座真ウフジチューウーエーと関連する説話群を事例として――」『民間説話の研究――日本と世界』（関敬吾博士米寿記念論文集）同朋舎　一三〇―一六一

(8) 『南海日日新聞』（一九八七・十・六）記事一九八七・十二・二八聞書。

(9) 松井健　一九八六「前掲論文」四〇・六四・六六

(10) この点についての検討は別の機会にゆずりたい。次の参考文献をあげるにとどめる。
Jan Harold Brunvand
○1981 The Vanishing Hitchhiker American Urban Legends and Their Meaning, W. W. Norton & Company, New York, London.
○1984 The Choking Doberman and Other "New" Urban Legends, W. W. Norton & Company, New York, London.
○1986 The Mexican Pet More "New" Urban Legends and Some Old Favorites., W. W. Norton & Company, New York, Lonpon.

（やました・きんいち／鹿児島経済大学）